　日が短くなるとなぜか縁側に座った祖父の横顔を思い出す。

　大きな声で高圧的な話し方をする祖父は、私にとっては怖い存在でしかなく、あえて近づくことは無かったが、あの日は祖母と母が病院に行ったきりいつまで待っても帰って来ないので、祖父と近所の銭湯へ行き蕎麦屋で早めの夕飯を済ませて二人きりで家にいた。

　「あきのひはつるべおとし」と祖父が呟いた。先週までうるさかったアブラゼミはもういないのに、祖父の声は何かにかき消されたようにか細かった。私は幼いながらも季節の移ろう寂しさと、家族に何か不幸なことが起きかけているのをぼんやりと感じていた。